

# 尚綱大学生によるレポート⑧

## 「熊本地震」から一年 若い世代の復興への思い

### 「熊本地震」と「選挙」



尚綱大学四年  
大田 葵  
(大津町在住)

余震などで混乱している中、選挙戦は繰り広げられました。問題視されるのは投票率の低さですが、今回も例外ではなく、投票率は過去最低を更新しました。

要因はいくつか考えられますが、仮設住宅などで生活し投票に行きづらかった人や、精神的余裕のない状況下で落ち着いて検討し、投票することができなかった人もいたのではないのでしょうか。私自身、有権者となってもなく地震を経験し、投票もあまりしたくない中での選挙となり、とても困惑したことを覚えています。

それでも投票で考えたことは復興のことが中心でした。復興に向けて、どういうことをされるのか、考えられているのか、それは実現可能なのか、などですが、考えれば考えるほど分から

なくなりませんでした。もちろん投票はそれが全てではありませんが、自分と関わり

の近いことを考えてしまいます。前途はまだまだ長いと思いますが、積極的に地元の政治から関心を持つて復興について考えていきたいと思っています。

今後も様々な選挙が行われますが、このような状況下で県内の投票率を上げるためには、仮設住宅等の被災者の状況に合った投票方法を検討し、また、実現可能性の高い具体的な復興策を明らかにすることが大事だと思います。

### 熊本地震1年が経過して



尚綱大学三年  
川原 葵  
(菊陽町在住)

未だに多くの被災者が避難生活を余儀なくされ、まだまだ復興の目処は立っていません。

最近の報道では、熊本県内の被災地17自治体にアンケートを行なった結果、災害時の対策を定めた「地域防災計

画」の見直しを終えたのはわずか3自治体でした。復興・支援活動が今も続いており、将来の計画にはまだ手がつけられない現状にあることが考えられます。私の住む地域は幸いにも被害が少なく済みましたが、いつ大きな地震が起きてもおかしくない状況下で不安な日々を過ごしていました。

しかし、熊本の人々が1日も早い復旧のために尽力する姿やその笑顔に私の心は何度も何度も救われました。私は行政にも私たちの心に寄り添う支援策を充実させて欲しいと考えます。実際、一人ひとりの力には限界があつて、地域全体を動かす力を持つのはやはり行政であると思うからです。

今後の災害時や復興のための財源の確保、被災した高齢者や子どもたちへの支援策等、見直して欲しい事は沢山あります。大きな災害はいつ起こるか分かりません。ぜひとも迅速な対応をいただきたいと思います。

### 「日常」と「非日常」



尚綱大学三年  
直塚 理子  
(熊本市在住)

地震から一年が経過し、「早いな、もう一年が経つのか」と思う一方、大

きな地震響きと倒れる家具、避難する人々など、その光景ははつきりと覚えていきます。地震後は「日常」生活がどれだけ幸せなのかを痛感しました。

地震後一ヶ月、二ヶ月と過ぎてゆく中で、差はありましたが徐々に復興して行く姿が見られ少し安心できました。そして、私の周りでは大学の授業の再開や水道の復旧など日常生活においての復興も進んでいきました。

一年が経つ今、私の周りの環境は地震前とほぼ変わりがありません。しかし、地震の被害が大きかった地域では、仮設住宅で生活する人々が大勢おられ、通れない道や倒れたままの建物があります。まだまだ復興はこれからで、「日常」が取り戻せていない人々が沢山います。

同じ県内にいながら、いつの間にか「対岸の火事」にならないように、「非日常」がまだ近くで存在していることを忘れないようにしたいと思っています。出来るだけ多くの人が早く「日常」を取り戻すことを願って止みません。